



11月26日は「いいふろ」の日でした。この日、テレビでこの地方の銭湯について、建物、風呂の浴槽に使われているタイル等には、大変貴重なものが残されていると紹介していました。

昭和40代まで、全国の都市では多くの家庭が銭湯で入浴するのが一般的だったそうです。鶴舞にある銭湯資料館のパンフレットに依れば、昭和45年万博が開催された年には愛知県で709か所の銭湯があり、大人35円、子供10円。平成元年には491軒、大人270円、子供50円になっています。では、その頃、この辺りにはどのくらいの銭湯があったのか、このあたりに長く住んでいる人に聞くと、千種郡道沿いパローの前で、今パソコン教室になっている辺り、高蔵高校を少し北に行った交差点の角等、御剣学区だけでも6軒の銭湯があったということです。内湯の少ない家が多く、銭湯は欠かせない存在だったようです。

今から20年ほど前、家の近くに船原温泉という銭湯が、少し南に歩いて行くと梅の湯という銭湯もありました。船原温泉には、自家の庭木を剪定した後の樹木を運び入れて燃やしてもらいました。その頃の銭湯は、解体した家屋の廃材なども燃料にされていたようです。久しぶりに近くの銭湯に行き、燃料について伺うと、重油、ガス、薪が使えるが、今は重油炊きだそうです。高い煙突は現役でした。

銭湯が開く午後四時を少し回った時に訪れたのですが、すでに数人の先客が入浴されていて、初風呂を楽しんでおられました。

常連のお客さんのようでした。湯は少し熱め、少し深い風呂、電気風呂がありました。銭湯にはもちろん台秤がありましたが、主人の言われるには皆さんは隣にあるデジタル体重計に乗られるとのことでした。出口にはもちろん、冷たい飲みものが冷蔵庫に入っていました。

少し深い浴槽で湯を楽しんで帰りました。

銭湯は内風呂に無い楽しみが出来ます。

時間を気にかけず、手足を十分延ばして湯につかり、一日の疲れを癒すことが出来ます。

歴史を遡り、本格的に銭湯（湯屋）が普及したのは江戸時代で、江戸では防火上の理由から家庭風呂が禁じられたため銭湯が数多く建てられたそうです。

時代劇を見ていると、江戸の町を取り締まる同心たちが、朝早くに風呂に行くシーンが出ます。これは、奉行所のある八丁堀（今の東京駅八重洲口から京橋方面）近くに銭湯があり、女たちが湯に入りに来るまでならいいだろうと女湯でゆっくりつかっていたそうです。しかも、そこには刀掛けがあったといえます。

与力、同心だけでなく、江戸の庶民は、長屋には風呂などなく、仕事で汗を掻いた後など、「おい、湯にいつてくるぜ」と出かけていく湯には、二階に一休みする部屋もあり、そこで将棋を指したり、団欒をすることが出来たようです。今でいうスーパー銭湯の団欒場所の様なものでしょうか。

そして、銭湯（湯屋）のお湯は水戸黄門の時代劇で見ることが出来る、「由美かおる」の入浴シーンのように湯屋の外で湯を沸かし、湯殿に入れる方式でした。

寒さの増すこれから、ゆったりと湯につかるのは何よりの御馳走かもしれません。

(完)